

古今和歌集 仮名序

授業プリント

「古」は万葉集を指す

①（和歌）

やまとうたは、人の心を②（種）として、
よろづの③（言の葉）とぞなれりける。係り結びの法則
世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、
心に思ふことを、

見るもの、聞くものにつけて、言ひ出せるなり。

花に鳴く鶯、水にすむ蛙の声を聞けば、

生きとし生けるもの、

いづれか歌をよまざり④（ける）。

力をも入れずして、天地を動かし、

目に見えぬ鬼神をも、⑤（あはれ）と思はせ、

男女のなかをも和らげ、

猛き武士の心をも、慰むるは⑥（歌）なり。

対句

○成立・・・⑦（平安）時代初期 和歌の数え方

○歌の数・・・約⑧（千百）首

○特徴・・・天皇の命令（勅命）によって作られた、最初の

⑨（勅撰和歌集）。国家事業

春・夏・秋・冬・⑩（恋）に分類

古今和歌集の撰者

・紀貫之…⑪「土佐日記」わが国で初めての男性によるか

な文の日記。

やまとうた（和歌）を人の心が自然と生み出すものと語り、その力は天地
の神から様々な人の心を動かすとした考えについて意見を書きなさい。

君待つと 表現確認プリント

枕詞まくらことば

主に五音からなり、ある語句を導き出すために、ある特定の言葉の上に置く修辭的な言葉。

例 からころも↓着る、裾

白袴しろたへの↓衣

天の原↓ふりさける

序詞じよことば

七音以上からなり、ある語句を導き出すために、前置きとして用いられる修辭的な言葉。

例 多摩川にさらす手作り↓さらさらに

新しき年の始めの初春の今日降る雪の↓いや重しけ吉事よごと

対句ついく

意味の対照的な同形式の語句を前後に対置して、リズム感を出す。
例 「渡る日の 影も隠らひ」と「照る月の 光も見えず」など

歌枕うたまくら

和歌に読み込まれた有名な地名。特定の心情と結び付く。
例 飛鳥川↓世の無常。

体言止め

一首の末尾を体言（名詞）で終わらせるもの。
例 「・天あめの香具山かぐ」「・・いや重しけ吉事よごと」「・・・秋の夕暮」

倒置法とうちほう

主語と述語などの順序を逆に叙述する技法。
例 「語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 不尽の高嶺は」

擬人法ぎじんぽう

人でない物を人のように表現し、身近に感じさせる。
例 「花さそふ・・・」の歌

縁語えんご

一つの言葉に縁のある語を使う。
例 「玉の緒よ…」の歌 「緒」に関連する「絶え・ながら・よわり」

本歌取りほんかどり

すでにある古歌（本歌）の語句を意識的に取り入れる技法
例 「花さそふ・・・」「見わたせば・・・」の歌。

係り結びの法則

「ぞ・なむ・や・か・こそ」が来れば、文末が変わる。